



本田和子

「メルヘンと女性心理」

M・L・フォン・フランツ著 秋山さと子、野村美紀子訳

(海鳴社、1979・1月)

「女らしさ」とは、女性にのみかかる特性ではない。姿態や粧いのそれを超えて、人に「内在する女性的なもの」、それは、肉体的な性にかかわりなく、男性にも潜む人間性の重要な側面なのだ。「女らしさ」の解明が、人間理解に連ることは言うまでもない。

これら「内なる異性」に光を当てて、人格の全体的把握を試みようとするのが、ユング心理学の立場である。この

本の著者、M・L・フォン・フランツ女史もまた、ユングの高弟の一人であり、メルヘン解釈の第一人者とされている。訳者の「あとがき」によれば、博学多識の才女で、ユングに娘のように愛されていたと言う。みずからも女性であり、外形的にも「小柄で色白な」女らしい容姿の持ち主であった著者が、衆に抜きん出た知力を駆使した「女性心理」の解明といえは、それだけで、充分に魅力的である。しかも、それが、私どもにも身近な昔話の数々を、分析・解説するという興味深い作業を通じて、進められていくのだ。

昔話を、人間の普遍的無意識の現われと見て、物語を手

がかりに、心の深層に迫ろうとする試みは、最近、幾つかの優れた著作によって、私どもにも親しいものになってこようとしている。河合隼雄氏の『昔話の深層』<sup>\*</sup>や、B・ベッテルハイム氏の『昔話の魔力』<sup>\*</sup>がそれである。本書は、それらと重なり合う部分を持ちながらも、但し、「女性性」に焦点が当てられているため、物語の解説が若干異なる場合も少なくない。これは、訳者も付記するように、昔話のように豊かな素材は、「なにを目的とし、どこに重点をおくかによって見方が異なる」ということであろう。

従って、本書は、「女性的なもの」の機微に迫るスリリングな面白さを堪能させてくれると共に、昔話の多彩な魅力に、改めて瞻目する機会を提供してくれる。私どもの身近にあるものが、人間を理解するためのこんなにも素晴らしい鍵となり得るのである。



具体例に言及しよう。グリム童話に「ユキとバラ」という物語がある。ユキとバラと呼ばれる二人の少女が、母親と平和に暮している。ある日、凍えかけた熊を助け、以

後、一緒に暮し始める。少女たちは、森で、木の割れ目にひげをからませて困っている小人の老人を救けるが、小人は感謝するどころか、ひげを切られたことに文句をつけて二人を罵り、次々と勝手な要求を出す。気のよい少女たちは、年老いた小人に同情し、懸命にその要求を叶えようとするが、小人の恩知らずぶりは、際限もない。そこに、例の熊が出てきて、一撃のもとに小人を打ち倒した。熊は、呪いが解けて王子に戻り、ユキと結婚し、バラも王子の弟と結婚して、末長く幸せに暮した。

さて、この物語が、「女性心理」のどのような側面を明らかにかにし、女性原理と男性原理の関係を、いかにように解明するのだろうか。

物語の冒頭部は、先ず、無垢の幼年時代のバラダイスを物語る。母を中心として、バラの花に囲まれた穏かな生活、然し、父親不在のひたすらに女性的な世界である。やがて、「熊の到来」という形で、男性原理が出現した。凍えかけた体を介抱され、少女たちの遊び相手になるなど、熊は善良で優しい動物だが、行動すべき時が来ると小人を一撃で打ち倒すほどの力を発揮する。少女たちが過度の女性性のゆえにセンチメンタルな同情に溺れかけていると

き、熊は一瞬のうちにそれを断ち切るのだ。

これは、女性にとって極めて示唆に富んだ物語ではないだろうか。女性の一面的世界は、男性との関係、或いは、自己の「内なる男性性」、つまりユングがアニムスと名付けたものによって補われることで、全体性を獲得し得るのである。女性が余りにも女らしすぎて、アニムスの力が弱いと、生は、彼女を圧殺しかねない。

ところで、この物語の場合、小人もまた、内なるアニムスの一つの姿と見られる。不機嫌で怒りっぽく、絶えずトランプを起こす厄介な存在。これは、アニムスの破壊力がマイナスの現われを見せた場合の典型であり、しかも、何事にも「イエス」としか言わない過剰な女性性への補償なのだ。振子が一方へ振れすぎたなら、当然、反対の極に揺れもどる必要があるからである。

物語の終りに、小人は死んで、代りに、熊の弟が突然出現し、バラと結婚する。弟は、小人の「転身」と考えてよいだろう。つまり、はじめは「熊と小人」という二つの男性性があったのだが、小人は、熊という健康な男性原理に転身し、少女は、結婚という形で統合を成し遂げたのであった。二人の少女と二人の男性の作り上げた四人一組、

「四」という数字は、ユングによれば、精神の全体性を象徴する。物語は、女性の人格が、完全な成長点に到達する姿を示しているのだ。



ユング派の昔話研究の特色の一つは、それが、絶えず豊富な臨床例との関連で読み解かれるということ、逆から言えば、症例の複雑な心の問題を洞察するために、昔話に象徴された事象が巧みに活用される、ということであろう。例えば、この物語に関しても、著者は、不遇な青年に同情を注ぎすぎた余りに、自身の生命を危うくされた老嬢のケースなどを引用している。私どもは、それらの実例を通して、哀れにも無駄使いされていく「女らしさ」を垣間見せられ、戦慄を感じざるを得ない。

一方で、ユング派の分析家たち、とりわけ本書の著者は、昔話の解釈に当って該博な古典の教養を駆使し、人間の文化に対する透徹した視力を発揮する。例えば、この物語の熊が示した「憤怒」をめぐる、キリスト教文化圏での「聖なる怒り」の問題が検討されるのだ。

小人の「ひげ」のような個々の象徴の解釈に関しても、その背景となる文化的素養の豊かさは瞠目に価いしよう。また、小人のひげを読み解く過程で、「妻殺しの青ひげ」や「つぐみひげの王さま」、或いは「オル・リンクランク」など、他の昔話の「ひげ」にも言及されていて、私どもが新しい昔話に出会ったときの楽しみを、倍加させてくれる。

結果として、私どもは、次のようなことに気付かされるのではないか。すなわち、人間の心の問題は、単に「心理学という専門領域」にのみ閉じこめらるべきことがらではない。それは、宗教や芸術は言うまでもなく、人間の生み出したあらゆる叡智を活用して、多方向からのアプローチを必要とするものなのである。



本書では、上記の例以外に六篇の昔話が解説されている。因みに、訳者の一人秋山さと子氏は、ユング研究所で学んだ研究者である。

女性による「女性心理洞察の書」が、二人の女性の手で

訳出されたことは、二重の意味で興味深い出来事と言えよう。

\* 1 河合隼雄「昔話の深層」福音館書店、1976

\* 2 B・ベッテルハイム、波多野他訳「昔話の魔力」評

論社、1978

「はるにれ」

(こどものとも、274号 福音館書店、1979・1

月)

十勝の草原に、枝を広げた一本の「はるにれ」。カメラは、ひたすらにその木をめぐる、枝の囁きと、光と風の動きを、無言の映像に託そうとする。

金茶色に輝く秋の草原の「はるにれ」。薄くたなびく巻雲に僅かの明かるさを残しながら、暮れていく原野の「はるにれ」。

そして、十勝に冬がやってくる。

極寒の雪原の黎明は、青一色の無言の世界。「はるにれ」も、また、ひとときわ深く青い陰として、その静謐になろう。雪の地平が淡い金に染まって、薄墨の雪原に光のしまが流れ、やがて空をうつして雪の面も青く澄みわたるとき、枝々は、一斉に透明白さに凝結し、輝きの音をたてる。

ゆつくりと冬が遠のく。すべてがおぼろにかすむとき、「はるにれ」も、空の中にその輪廓を溶かそうとするが、然し、深い夜の闇が訪れると、その立ち姿は一きわ黒々と動かない。枝々は沈黙し、永劫の天地の支え手となる。

そして、草原に若緑の風が吹く。見えかくれする黄色の、白の、野の花たち。

「はるにれ」は、いま、梢に葉をひるがえし、颯々と渡る大気と共に、生命の讃歌を歌っている。

一ことの言葉も文字もないこの絵本が、私どものものに耳に響かせるもの、それは、限りなく明澄でしかも豊饒な、宇宙と人生の歌である。この映像の力の前に、人は、語るべき言葉を持たない。

ただ沈黙し、くり返し頁を繰り、憧憬し放心する以外にすべのない絵本を、私どもは、また、身近に加えることが出来た。

\* \*